話題　其の２３：**パレスチナ問題　“怒りのメール”**

　昨日、職場の友人からメールが届きました。
そこには１２枚の写真が貼付されていていました。メールのタイトルは、No comments。主文には、「これらはとても残酷です。人によっては観ない方がいいです。世界中にいるあなたの友人に添付して送って下さい。あなたの支援に感謝します」とありました。
因みに、発信元から約５０名へ送信され、私の友人からは、１８名に転送されています。
　写真は、いずれもパレスチナのどこかの病院で撮影されたと思われ、痛ましく傷ついた死体で、中年の男女、幼い子どもなど、信じられない光景です。
　さて、これらの写真を前に今起きている現実をどう理解しましょう？
まず、この「写真を“友人ネットワーク“で送信している」という背景から考えましょう。
これらの写真はテレビによる放映は困難だと思われます。お茶の間向きではありません。
そして、これを観た人達は一方的に敵（イスラエル）への憎悪を増幅させるに充分です。
「**暴力が暴力を誘う**」事になりはしないか？　果たして、何人の人が冷静に判断できるでしょうか？
最初にこの写真を手に入れた人は、そこまで考えたのだろうか。それとも、その効果を狙ったのか？
　今現在もパレスチナで何が起きているのか？　それを多くの人達が正しく理解することはとても大切なことです。この写真はとても大きなインパクトがあって、それを考えさせるには効果的です。
　見るに耐えない写真ですが、もし頼まれて、私が友人に送るなら、タイトルと主文を変えますね。
タイトル：Stop the Violence　（暴力を止めよう）
主文：「残酷な写真を貼付しましたが、実際に起きている事実です。世界中にいる友人達と共に、
　　“何をなすべきか？”考え、そして話し合って下さい。」
　いいえ、やはり頼まれても、今の私にはこれらの写真は送れません。
イスラエルの人達も「自爆テロ」で傷つき、同じような写真が撮れるでしょう。エンドレスです。
　ここで、私が大切にしている「マハトマ　ガンジー」のビデオから引用します。
場面設定：第２次世界大戦の最中、イギリスからの独立を目指して「インドにおける非暴力運動」のリーダーとして闘いを進めるガンジー。イギリスが専売権を持つ塩を「インド洋から採れる塩は我々の財産である」と、民衆と共に塩の製造販売を始めた為に、逮捕・監禁された。そのガンジーをアメリカのライフ誌記者：パークス　ホワイト女史がインタビューをしているという場面です。
ガンジー：『友人がよく言う事だが、英国は物資をくれるけれども人間の幸福は物品ではない。例え豊でもね。幸福は労働と仕事に対する誇りから来る。インドは村が命だ。村から貧しさを追放するのが先決だ。**貧乏は最悪の暴力**でね。建設的計画がインドを救う唯一の非暴力的解決だ。暴力は西洋の持つ不幸だ。それを輸入するのは進歩ではない。』
パークス：『ヒットラーにも、“非暴力”で？』
ガンジー：『非暴力は苦難の連続だ。この戦争にも苦難は付いて回る。**ヒットラーの不正を受け入れてはいけない。その不正を明かすのだ。**その為には死をも覚悟する。』
　中東紛争の解決に、インドの教訓は生かせないのでしょうか？
それには、「教育」がキーワードになるかと思われます。
　これまでに滞在した、ネパール、フィリピン、ヨルダンに共通している事は、小学校教育で、体育や図工などの科目が殆ど無いことです。その結果、スポーツから学ぶ「チームワーク形成」や図工から得られる「ものづくりセンスの能力開発」等重要な部分が遅れてしまいます。第二次対戦で多くを亡くした日本の復興には、労働者各自の「ものづくりへの達成感」と「企業のチームワーク」が大きく貢献していると思われます。ヒンズー教国家のネパール、キリスト教国家のフィリピン、イスラム教国家のヨルダン。それぞれの宗教を背景にした道徳教育がなされています。それらが、完璧な道徳教育であるとは断言できないまでも、いずれも「人間のあるべき姿」を指し示す、平和至高です。
　国の発展に貢献するのは労働の喜びとチームワークでしょう。貧困撲滅には経済発展を、経済発展にはチームワークを、チームワークには基礎教育の充実を！　これが、国際協力のスタンスですね。
****
執筆及び編集：久米　篤憲